

基本情報 ■作者：燕石斎薄墨(?~1834) ■年代：文政10年(1827)前後

■寸法：縦17.2cm 横13.0cm 厚さ0.2cm



仙台藩の民俗行事を 今に伝える「往来物」

往来物とは

『仙府年中往来』は、燕石斎薄墨(えんせきさいうすずみ)によって撰された「往来物」である。

往来物とは、平安末期から明治中期に至るまで初等教育の教科書、副読本として編まれた書物の総称である。本来は手紙文、特に往復書簡の模範文例集であったが、中世以降、作文のための短句・単語集や文案・文例集となり、書簡集形式をとらないものでも「往来」の名を称するものがあらわれる。近世に入ると、庶民教育機関としての寺子屋の普及と学習人口の増加によって、往来物の種類も出版部数も飛躍的に増加し、内容にも学習上の工夫が加えられ、多様化していく。

『仙府年中往来』について

本資料には、正月・七夕といった年中行事や、**東照宮**^{*1}・竹駒神社・塩竈神社等における祭礼が詳細に記されており、撰者の薄墨が城下のみではなく、つぶさに仙台領内の各地を巡見したことが伺える。^{*2}

榴ヶ岡^{*2}の花見など現代に通じるものもあり、なかにはまったく姿を消したものもあり、藩政時代における民俗行事を考える上でも非常に貴重である。特に、東照宮における例祭(仙台祭とも)では城下の町々を神輿が渡御し、山車が出されるなど荘重華麗な催しであったことが分かる。

また、当時の書体としては読みやすく、且つ振り仮名もあって、多くの人々に親しまれていたと考えられる。

文人・燕石斎薄墨

燕石斎薄墨は水戸生まれの文人で、文政元年(1818)に仙台の地に住み、著作活動を行った。また、仙台藩の御用板所であった「裳華房」の伊勢屋半右衛門(いせやはんえもん)と知遇を得て名を広めたことで知られる。代表作は『江戸道中往来』、『竹駒詣』、『塩竈詣』(『KOREMITE』VOL.1参照)、『金華山詣』、『平泉詣』などがある。

本作の冒頭部分に『和漢朗詠集』に所載されている慶滋保胤(よししげのやすたね 平安時代の文人)の漢詩が引用されており、薄墨が文学に精通していたことが伺える。

学芸研究員 熊谷 明希
実習生 白銀沙也佳

参考文献
吉岡 一男『「仙府年中往来」に見える「まつり」について』(『仙台郷土研究』15-1 1990)
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市 2001
平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第4巻 宮城県の地名』平凡社 1987

用語解説 詳しくはP26へ

*1 東照宮
*2 榴ヶ岡

学芸研究員の



学芸研究員
熊谷 明希

『仙府年中往来』には藩政時代における、仙台領内の民俗行事が詳しく記されています。現代に通じるものもあり、まったく姿を消したものもあり、非常に興味深い資料です。

特に、東照宮における例祭では城下の町々を神輿が渡御し、山車が出されるなど荘重華麗な催しであったことが分かります。また、振り仮名もあって読みやすく、挿絵も豊富です。

この資料のここがすごい!!

藩政時代における、仙台領内の民俗行事が詳しく記されている!

お気に入りポイント

挿絵が豊富で振り仮名もあり、すごく読みやすい!!